



共生の時代

'10
8月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

グリーンコープ 地域運動交流集会開催



各地の組合員・ワーカーズ約900人が集まった

4・5面に関連記事

Contents

ホームレス問題を考える 17	
互いに助けあい自立へ向かう	2
うちの生産者・うちのメーカー [㊟]	
豊肥アグリ企画	3
2010年度 グリーンコープ地域運動交流集会	
力強く地域に広がるグリーンコープ運動	4・5
～グリーンコープのこだわり再発見!～	
他人事ではない 生物多様性条約	6
パキスタンの子どもたちへ支援を!	7
広がる古着のリサイクル	



鳥取県米子市で生まれ育つ。夫、一男二女の5人家族。現在は夫と、社会人となった長男との3人暮らし。グリーンコープ生協とつとりの前身生協時代からの組合員

暮らしの中の「循環」はおもしろい

プロフィール

米子市生活排水対策推進指導員
を長年務めた

赤井 正子 さん

20年前、米子市から「米子市生活排水対策推進指導員」を委嘱され、「私にできるのであれば」と引き受けた。公民館などに市の職員とともに出かけ、水環境を守るために家庭で行うのが役目。例えば油汚れのお皿はぬぐってから洗うといった赤井さんが普段やっていることだ。シンクの排水口ネットの目が大きかった時代には、ストッキングをか

機関紙に載った提案趣旨を隔々
「きぬぎぬや白鳥はこゑち
らすなり」
心の内をまっすぐに詠んだ。

鳥取・島根両県にまたがる汽水湖「中海」。その一角にあり、コハクチョウの飛来地として知られる水鳥公園は、赤井さんの家からわずか1kmほどの距離。「一冬を過ごしてコハクチョウがシベリアへ帰る時、うちの真上を通るの。鳴き交わしながら帰っていくのよ。2月末頃になると、その日はいつかとそわそわするの」。北帰行の夜は長年の友を見送る心持ちになり、心が騒ぐ。

「グリーンコープは私の生き方に合致している」と年を経るにつれグリーンコープの利用が増える傾向にある。「トマトの生産奨励金のことを知ると、そういうことなら買わなくちゃと思うの」。びん牛乳開発時のみるく出資金の時は機関紙に載った提案趣旨を隔々

鳥

ぶせることなどを紹介したこともあった。市場に溢れる洗剤類はほとんど自分で試し、掃除・洗浄はクエン酸と重曹、プラスチックは少々ですべて片付くことにもいきついた。指導員を引退した3年前「ダンボールコンポスト」に出会う。台所の片隅に置いたダンボールの中で野菜や果物の皮などの生ごみが微生物の力を借りて堆肥に生まれ変わっていく。臭うこともない。感動ものだった。完成した堆肥は家庭菜園にすきこむ。家庭の中の循環が「楽しくて」夢中になった。こんなおもしろいことを伝えない手はないと昨年1年間は紹介して回った。

明日は父の日。母に父の欲しいものを尋ねると「履きもの」がいいとのこと。きつともうほろぼろになったものを履いているのだから。ものを大切にする人だった。真面目で几帳面で人づきあいが悪く勤勉な父は、幼い頃の私たち兄妹にとっては窮屈な人だった。遊ぶことに興味がないような人で、家族で行楽に出かけた記憶がない。父との夏の思い出は3つ。夜になると縁側でたらいの水に足をつけて涼んでいた父に星の話を聞いて

送 信

ていたこと。夏祭りでは金魚すくいをして一緒に花火を観たこと。海辺に千鳥が卵を産んでいるからと自転車の後に乗せられて、後輪に足を踏まされてしまったこと。父は覚えていないだろうか。さて、どんな「履きもの」を父は喜んでくれるだろう。私の頭の中はもう決まっている。黒い鼻緒がついたもの。「もったいない」と大事にしまっておく父の姿が目につく。

武岡 理恵
グリーンコープ生協ふくおか副理事長

互いに助けあい自立へ向かう

浮かび上がったきた生活困窮層の実態

「抱樸館」は仕事、住まい、人との絆を失った人々の自立を支援する施設です。

メディアでは「僅かずつ経済は回復基調」と報じられています。しかし、これまではあまり見られなかった若年層の困窮者が増えてきており、「抱樸館福岡」でもその傾向が顕著に見受けられます。報道される経済状況とは裏腹に、生活に困窮する人々は幅広い年代層に広がっています。

5月1日に開所してから約2ヵ月の抱樸館福岡取材しました。

ホームレス問題を考える 17



昼食後に開かれた就職のためのセミナー。講師は亀津正武さん(北九州社会福祉ボランティア大学元校長)。面接に臨む時の心得などが話された



相談員といっしょに昼食を摂る。「このみかんはスッパイ」声が明るい

手作りの昼食。温かいご飯はおかわり自由



ボランティアとの茶話会も開かれている



雨の日の汚れやすいエントランスをきれいに掃除する入居者。背中汗でびしょりだ

抱樸館福岡が入居者を迎えるのは約1ヵ月の6月18日、入居者は29人となっている。開所当初は、巡回訪問や炊き出しなどの時の働きかけで、入居するホームレス者が少しずつ増えていくと考えられていた。しかし、スタートしてみると電話での問い合わせが圧倒的に多く、年齢も幅広い。特に40歳代以下の若い層の相談が増えている。状況も長期の野宿状態以外のケースも多く、長期化・高齢化がホームレス者の傾向と言われる一方、これまでは見えにくかった困窮者の姿が、浮かびあがってきている。

同様に現在入居している人たちも、背景はさまざま。定職もなく友人の家を転々としていた若者、家族との関係が破綻した人、精神的な病気による失業、不況による事業の失敗からすべてを失う、派遣切りや長期の野宿状況の人もある。問いあわせ時点での状況も、

当の入居者の対応に当たっている。副館長の瀬崎篤弘さんは「開所して2ヵ月。見学者も多く、スタッフはフル回転の状況が続いた。最近やつと落ち着いてきている。入居者の背景も多様で、これまで経験したことのないケースも多い。若いスタッフが多いが全員で力をあわせて対応している。入居者は、大きなトラブルや問題を起こすこともなく、ルールも自発的に守り、掃除などもみんな積極的にしている。一人ひとりの自立に向けたケアも少しずつ進んでいる」と現在のようすを話す。

入居者は、基本的なルールを守ることは、比較的自由だ。玄関には自転車が入らない。外出に使用されている。就職活動、各種の手続きに外出する人、セミナーに参加する人、熱心に玄関を掃除している人。ここでの生活が一人ひとりの入居者の日常となっている。

開放的で明るい建物、誠実に対応するスタッフ。入居者もお互いに声を掛けあい、助けあう。大きな家族のような雰囲気。スタッフが中心にチームとして、担

の対応が多い。他のスタッフに支えてもらいながら仕事をしている。また、入居者のがんばる姿には「負けず」にがんばろうと意欲が湧く。「まず、上野さんに相談しよう」と入居者に思ってもらえる相談員になりたい。そして、人の根源的なものに携わる、この仕事をずっと続けていきたい。

自立に向けて

自立に向けて

自立に向けて

自立に向けて

自立に向けて

スタッフ紹介

入居者のがんばる姿にはげまされ

相談員 藤田寿規さん 23歳



大学時代、社会の矛盾に苛立ちを感じ、友人たちには正論を口にしてきた。しかし、何となく自由なく育ち、自分の言葉にみあう行動をとってきたわけではなかった。そうした自分に常に違和感があった。それを乗り越えたかった。この仕事を選んだ。



気軽に相談に応じる

相談員 上野麻帆さん 22歳



福祉系の専門学校でソーシャルワーカー科を卒業。テレビで放映されたNPO法人北九州ホームレス支援機構の活動に感動し、北九州と福岡の炊き出しに参加しはじめた。その時、この募集を知った。家族はグリーンコープの組合員、この仕事につくことにまったく不安はなかった。

はじめは、自分が若いことから、入居者が何でも相談してくれるのか、その相談に自分が共感を持って対応できるのか不安だった。一人ひとり、顔を合わせて話をしていると、そんな危惧はすくなくなくなった。長い野宿生活や家族との関係など、複雑で難しい問題へ

事務 田中敦子さん 47歳



学生の頃から、アルバイトの行き帰りに見かけるホームレスの人たちに強い関心を持った。どんなことを感じながら、生きていくのか。6年前から「福岡おにぎりの会」などの支援活動にボランティアとして加わるようになり多くの出会いを体験した。

抱樸館福岡では、経理などの庶務を担い、入居者に向けて気持よく過ごしてもらうため、居室備品の調達や日用品の用意などにも心を砕いている。入居者にとってもスタッフにとっても「お母さん」のような存在でありたい。

入居者は、口には出さないが癒しがたいような傷を内に抱えていることが多いと感じる。この家庭的雰囲気の中で、少しずつ自己肯定感を取り戻し、自信を持って再出発してもらいたい。

リーンコープ運動

2005年にスタートしたグリーンコープ地域運動交流集会は今年6回目を迎えました。年々参加者も増え、2010年度は組合員434人、ワーカーズ376人、職員など41人、来賓9人(グリーンクラブ)。900人規模での開催となりました。

昨年に引き続き、「グリーンコープ運動の広がり」と「グリーンコープ運動の交流の更なる深化をめざして」をテーマに掲げ、全体会の終了後には同じ業種での交流会を行うワーカーズもありました。参加した組合員もワーカーズも地域に広がるグリーンコープ運動と相互の連帯を実感できる集会成为りました。集会のようすを紹介します。

実行委員長挨拶



グリーンコープ共同体代表理事 田中 裕子さん

グリーンコープの地域運動交流集会は、地域の取り組みをグリーンコープ全体で共有していくために毎年開催されています。

回を重ねるごとに、地域福祉の取り組みからグリーンコープの地域運動の取り組みへ、組合員とワーカーズの交流、ワーカーズとワーカーズの交流へと発展し、単協単位でも開催されるよ

うになりました。

2009年から、グリーンコープ内の共同購入・店舗ワーカーズの位置づけと主体の強化に向けて、能動的な動きを開始しています。

その中で地域の組合員活動とワーカーズの連帯した取り組みが生まれています。

グリーンコープ運動の広がりを、今日参加した組合員とワーカーズが実感する、そして交流を深めることで、グリーンコープの地域運動をさらに大きく、深く広げていくことをめざして、本日の交流会を開催します。

単協報告

組合員とワーカーズの連携した取り組み



左から久米田 薫さん 牧 幸子さん 浦水 恵美子さん

くまもとには5つの店舗があり、その運営は店舗ワーカーズ「マミー」が担っています。昨年「お店元氣プロジェクト」を立ち上げ、組合員もワーカーズも「私たちのお店」と意識できるような検討をはじめました。一番の成果としては、私たち組合員の意識が変わってきたことです。2010年度からは各地域本部に「お店経営委員会」が設置され、地域の組合員とワーカーズが共にすすめていく体制が整ってきました。

しみず店の取り組みとして、利用休止の組合員へ利用案内の電話かけや、パン作りなどの教室「ジョイ講座」を、組合員とワーカーズで協力して開催しました。「いらっしやいませと言わないう関係の組合員のお店」をめざして、組合員とワーカーズや地域の人々をたが寄合の所のような場所にするため、第一歩となりました。

初めての地区組合員総会



林 和子さん 篠塚 康子さん

初めての地区組合員総会に向けて意義と目的を理解することからはじめました。①組合員が、地域の活動・事業の内容についての決定に参加する場とする。②組合員が、グリーンコープひろしまの活動・事業の内容について実感する場とする。③組合員が参加しやすい、参加したくなるような楽しい場とする。以上3つをポイントとしました。

地区が主体となって開催した初めての地区組合員総会は、私たち活動組合員一人ひとりがグリーンコープの一員であることを実感し、生協の運営について考える取り組みとなりました。グリーンコープは組合員の声を形にしていく生協。声を届ける場である総会への参加を呼びかけ、そこから総代を選出する流れを作るための新たな一歩を踏み出しました。総会を地域に根付かせることをめざします。

人と人の絆を紡ぐ 抱樸館福岡



社会福祉法人グリーンコープ 副理事長 奥田 知志さん

5月1日、グリーンコープの皆さんに応援していただいた抱樸館福岡が開所した。予想以上に早いペースで入居者が増え、8月はじめには満室になる勢いだ。特に若い世代の生活困窮者が多く、人生経験が少ないだけに、その絶望感も大きい。

かつてのがんばれば報われる時代から、根本的な社会構造が変わった今、「物理的な満足」の追求から「心の幸福」が求められる。幸せは人との関係性の中で育まれるものだと思える。

人との関係性が切れてしまっているホームレス者は自分は何のために生きているのか分からなくなり、絆を取り戻すことでしか存在意義を見出すことはできない。人と関係していくことは、ある意味では痛みを伴う。その覚悟で人と人が関係していくことなくして、真の絆は生まれえない。抱樸館の事業をとらえて、入居者だけでなく地域やグリーンコープの人たちとの関係の中で、それぞれの生きる意味を見出すことができるのではないかと、それこそが抱樸館の存在意義なのではないかと思う。

抱樸館の取り組みについて「すばらしい。でも自分の町では困る」との反応が最初の建設予定地であった。安心・安全に対する意識が、自分たちだけにとどまっていると感じた。4月下旬、抱樸館福岡の建つ町内会のみなさんが、「ここを入居した人のふるさとにしたい」と桜の苗木を植樹してくれた。ここが入居者のふるさとになれたらと思っていたが、この地域こそがふるさとになり得ると確信した。

抱樸館福岡の報告

おおさか・ひょうごからの報告



ひょうごの取り組みを元氣なパフォーマンスで紹介

設立から5年、おおさかの組合員は8000人を超えました。昨年度は生産者やメーカーに来ていただき、学習会、交流会を行いました。参加した組合員は、産地やグリーンコープ商品をより身近に感じることができました。

総勢1000人の食べもの委員会、毎月3カ所学習・試食などを行い、学んだこと感じたことを組合員に向けて発信しています。

ひょうごは、昨年度から商品検討委員会、商品おすすめ委員会、組織委員会の3つの共同専門委員会へ参加しています。新しく開設した神戸西センターでは、ひょうごで初めての祭りが行われ1200人も参加者があり、大盛況でした。新たに広報委員会、組合員による託児グループも誕生。2010年度からは組合員事務局も誕生。組合員活動の広がりと充実に向けて、ますますがんばっています。

生活再生事業の報告

2006年にくまもからはじめた生活再生事業は、くまもと・おおいと・やまぐち(長崎)に広がり、金銭教育、消費生活支援、生活資金などの貸付を含めた生活再生支援に取り組んでいる。

ふくおかは、福岡県との共同事業「多重債務者生活再生支援事業」が3年目を迎えた。今年度から「生活再生家計指導事業」、「生活再生出張相談事業」もスタート。より相談者に寄り添い、再生の手伝いをしていく。

6月に貸金業法が改正され、テレビやインターネットを見た組合員外からの問い合わせが増えている。お金の問題で悩んでいる人たちへのアプローチをもう一段進める必要がある。今後も独自の家計表・キャッシュフロー表などを使ってきめ細やかに対応していく予定。

今年度、相談員のワーカーズ化をめざし検討をはじめた。相談者に寄り添い、豊かに広げていくために、メンバーは単協や男女の壁、過去の役割を越え新しい形のワーカーズ化へ向かう。

2010年度グリーンコープ地域運動交流集会

力強く地域に広がるグ



子育てサポートワーカーズは手遊び歌を披露。会場も参加し楽しいひと時となった



まとめ



福祉ワーカーズ連合会 理事長 江島 真弓さん

今年も組合員・ワーカーズが出会い、テーマについて深めました。福祉ワーカーズは今年では2000人規模の活動となりました。子育てサポートワーカーズは今年度福祉ワーカーズ連合会に加わり、子育て部会として活動をしていきます。共同購入、店舗のワーカーズも主体の強化がすすんでいます。また、グリーンコープ共同体はワーカーズのさ

らなる連帯のために事務局を新設、バックアップ体制が強化されました。各ワーカーズも県を越えた横のつながりを意識して活発に情報交換し、活動を広げています。新しいワーカーズが多数出席し、地域運動交流集会是ワーカーズにとってグリーンコープ運動を学ぶ場となつています。グリーンコープの食への運動の実践や組合員が地域の取組みなどを知ることができました。ここで得たことを生かしなが、組合員職員、ワーカーズが共に地域で連帯し、グリーンコープ運動を広げていきましょう。

福祉関係ワーカーズ



在宅福祉

介護保険や介護保険以外のワーカーズ独自の生活応援にも取り組んでいる。障がい者支援、産前産後の手伝いなど支援の内容は多岐にわたる



小規模多機能ホーム

24時間365日、利用者のライフステージに添った支援を行う。施設型としては、ほかにもグループホームや有料老人ホームもある

子育てサポートのワーカーズ

組合員活動時の託児や個人依頼の託児などを行い、子育て応援に取り組んでいる。やまぐちからかこしままで活動は大きく広がっている。現在、オールグリーンコープのモデルとなる保育所を開設するために、おおい、ふくおか、くまもとの子育てサポートワーカーズと組合員等が認可外保育所開設プロジェクトを設け検討を行っている。また、開設地となるくまもとでは、運営を担当する子育てサポートワーカーズが、開設準備会で2011年4月の開所予定に向けて検討を行っている。開所にあたっては、組合員にどのような保育所を求めているかなどアンケートをとる予定だ。生きる力を育む保育を目標と考えている。

家計とくらしのワーカーズ円縁

2008年のスタートから2年。12人のメンバーでグリーンコープの理念のもと「家計とくらしの応援活動」をすすめている。自分でお金の管理をすることで、お金の振り回されず、生きがいを持って暮らしているように提案している。2009年度は①組合員対象のライフプラン等の学習会(51回)②共済学習会(組合員向け16回、職員向け18回)③各単協の家計簿クラブのサポート(83サークル・246回)を活動の3本柱として掲げ、講師派遣業務等に取り組んだ。2010年度もさらに地域に向けて活動をすすめる。そのためにはワーカーのスキルアップを図り、積極的に研鑽を続けたいと考えている。



福祉用品店舗

一人ひとりのニーズにあった用品を提供し、自分らしい暮らしを支援している



デイサービス

入浴は一人ひとり。昼食などの食材もグリーンコープのものを使用



食事サービス

安心・安全な食材で心のこもったお弁当を届けている

ふくし情報でんわ

2009年度の相談件数は約6000件。多様で複雑になってきている福祉情報を適切に提供している

代理人運動報告

代理人ネットワーク運動は議会に代理人を送り、私たちが日常的に感じる疑問や要望を政治に反映させている。暮らしの中の課題について、調査を行いながら施策として解決できるよう陳情や請願、議会での提案や予算要望を行う。宗像市では小・中全て自校式の給食の実践、八代市ではダムの撤去運動など、それぞれの地域の課題に取り組んでいる。「地域社会を住みたい街に」を合言葉に、誰もが住んでいてよかつたと思えるような街にするため代理人ネットワーク運動は展開されている。

現在、福岡県内には8つの地域ネットワークで、9人の代理人が活動。熊本県では2つの地域ネットワークで、代理人1人が活動。来春は統一地方選挙があり、地域ごとに取り組む。福岡県議会議員選挙にも初挑戦の予定。市民運動は政治・社会を支え、変革する力を持っている。「生協、組合員、ワーカーズと共に代理人運動を広げていきたい」。

食品店舗ワーカーズ



グリーンコープエリア内に31店舗あり、約5000人のワーカーが働いている。より地域に根ざし活気ある

店舗となるために、組合員活動と店舗との連携を深める取り組みをすすめている。くまもとはワーカーズと生協とで「お店元気プロジェクト」・「ふくおかでは「店舗推進会議」などを開催し、おおい、やまぐち、かこしまでも生産者との交流会などを行い、より充実した店舗作りに取り組んでいる。店舗は地域の食への運動の拠点として、これからのいつそう開かれたものとなっていく。

共同購入ワーカーズ



ふくおか・くまもと・おおい(高根)の4生協にある個配や班配など、組合員への商品の配達や取り置きなどを担うワーカーズ。

ワーカーは648人。今年度は「担う事業の広がりを求めて」をテーマに検討をしている。モデルとしているのは、クローバー別府。ここでは、おおいの別府センターでセンターの9割の事業を受託し、独自事業として配食サービスなどにも取り組んでいる。共同購入ワーカーズは、自分たちの将来を見つめながら、年齢や体調に応じて働き続けることができる事業をめざし検討を深めている。



生物多様性

他人事ではない生物多様性条約 それは私たちの暮らし

生物多様性条約は「生命の条約」



原野 好正さん
大学で社会福祉学、心理学を学び心療内科に勤務後、現在はフリーランスで企画・編集・執筆を行う。NPO生物多様性フォーラム理事、NPOラムネットJ理事、MOP5市民ネットワーク副代表

開発や乱獲、外来種の持ち込み、遺伝子組み換え（GM）作物などによって生物多様性は、たいへんな危機に陥っています。2010年10月に名古屋市で、環境や生物について話しあう生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）とカルタヘナ議定書第5回会合（MOP5）が開催されます。それに先がけて6月21日に福岡市で、原野好正さんを講師にグリーンコープ共同体主催「生物多様性についての学習会」が開催され、119人の組合員が参加しました。講演要旨を紹介します。



熱心に話を聞く組合員

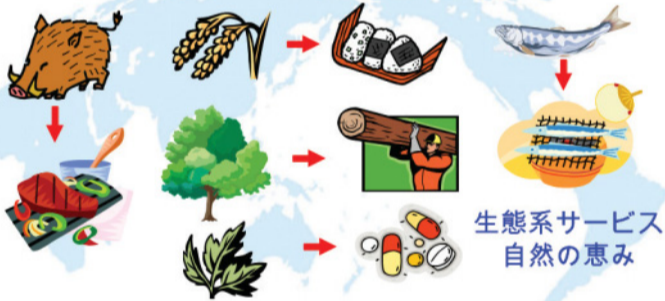
生物多様性条約3つの目的

①生物多様性の保全



種の多様性だけでなく、遺伝子の多様性、生態系の多様性を保全する

②生物資源の持続可能な利用



自然の恵み(生態系サービス)を利用するルールを明確にして、将来世代も等しく利用できるようにする

③遺伝子資源の利用から得られる利益の公正で衡平な配分



生物資源(遺伝資源)の原産・提供国(途上国)と、それを利用して利益を上げる先進国との間で、利益を配分するルールをつくる

メモ 生物多様性とは

私たちが毎日「あたりまえ」だと思っていること。呼吸をし、きれいな水を飲み、肉や魚を食べ、木やコンクリートでできた家に住む。これらはすべてさまざまな生物のもたらす自然の恵み(生態系サービス)の上に成り立っています。地球上では3000万種ともいわれる生物が、さまざまな環境でバランスを取り支えあっています。私たち人間も含めて生物のバラエティの豊かさとそのつながりを表現した言葉が「生物多様性」です。

「地球に生きる生命(いのち)の条約」とも言われる生物多様性条約。締約国は現在193の国と地域(全世界で締約国でないのはアメリカ合衆国・アンドラ公国・バチカン市国のみ)。会議には政府代表に加え、NGO、先住民、女性団体、企業、自治体、学術関係者、国連関係者など1万人強の参加が予想される。多様な生物資源を利用し恩恵を受けているのは人間だ。この地球上で人間がずっと生き続けられるかどうかは、私たちの生き方の問題と直結する。木が大切だからと砂漠に木を植え緑化してしまおうと生態系が変化して、そこに住む生物は生きられなくなる。砂漠には砂

漠の役目がありそこできれい生きられない生物が住んでいる。地球上の多様な生物はお互いに支えあっている。そのバランスを保ってきた。そのバランスが人間の手によるかかってないスピードで破壊され、生態系は危機的状況に陥っている。

生物の生息環境を守り、その恵み(生態系サービス)を将来も利用できるようにし、南北間の格差を解消しようという生物多様性条約を見直し、地球環境の将来のために重要なことが決められる会議(COP10、MOP5)が日本で開催されている。

生物多様性の問題は私たちの生活に最も近いところにある。私たちは多くの生物に支えられている一方で、多くの生物に影響を及ぼしている。生物を危機にさらしているのも人間だ。

①人間の活動・開発による危機
さまざまな開発により生物の生息地を破壊し、生きにくい環境を激減させている。

②外来種・化学物質による危機
外来種は繁殖力が強く、在来種を駆逐してしまう。遺伝子組み換え生物は在来種と交雑して野生化し、工場からの廃液、大気汚染も生態系をかく乱する。

③人の手が入らなくなることによる危機
林業が衰退すると間伐などが行われず、山は荒れてしまう。里山里海の生物多様性を守るには、人の手が必要な場合もある。

④地球温暖化による危機
気温の上昇により、生物の適応能力の差から生態系バランスは崩れ、海洋は酸性化がすすむ。

⑤遺伝子資源の不正な配分
遺伝子資源の原産・提供国(途上国)と、それを利用して利益を上げる先進国との間で、利益を配分するルールをつくる

⑥生物多様性の4つの危機
生物多様性の問題は私たちの生活に最も近いところにある。私たちは多くの生物に支えられている一方で、多くの生物に影響を及ぼしている。生物を危機にさらしているのも人間だ。

⑦COP10の目標
今年5月、生物多様性条約事務局は「2010年目標(2002年のCOP6)

⑧私たちの役割
環境と開発に関する国際会議「地球サミット」で議論された「地球温暖化」は、約20年の時を経て、今では誰もが知る言葉になった。また、2010年は国連の定めた「国際生物多様性年」。

⑨生物多様性条約(CBD)の目的を前進させるために設立された市民ネットワーク

五輪やサッカーワールドカップなど世界的なスポーツイベントでも環境に配慮した企画が多く取り上げられるようになってきた。私たちの生命と暮らしに直結する「生物多様性」を理解する人が一人でも増えることが、環境保全への第一歩と言える。

「農業を減らし、環境にやさしい農業を」との名目で作られた遺伝子組み換え作物を育てた畑は、今や荒地と化し、耐性を持つ雑草を枯らすためにさらに多くの農薬を使わなければならない状態になっているものもある。自然界のバランスを崩した責任を誰が取れるのか。生物資源の利用法の国際ルールを決める条約でもある生物多様性条約の果たす役割は大きい。COP10の日本での開催を、豊かな自然の恵みを子孫に残すため私たちが未来の生活を考えるスタートにしなければならぬ。

※生物多様性条約市民ネットワークの略。生物多様性条約(CBD)の目的を前進させるために設立された市民ネットワーク

生物多様性条約(CBD)の目的を前進させるために設立された市民ネットワーク

生物多様性条約(CBD)の目的を前進させるために設立された市民ネットワーク

生物多様性条約(CBD)の目的を前進させるために設立された市民ネットワーク

パキスタンの子どもたちへ支援を! 広がる古着のリサイクル



グリーンコープは、ネグロスとの出会いから「南と北の共生」を紡いで約20年。2007年にはNPO法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会(以下JFSA)と出会い、パキスタンとの関係を深めています。

4月19日、ファイバーリサイクルにこれから取り組む単協のために、JFSAの理事長 田邊紀子さんと海外事業担当西村光夫さんの講演や現在取り組んでいる4つの単協からの報告がありました。

今年度は、さが、(長崎)、くまもとが取り組む予定となっており、4月20日にくまもと、4月21日には、西九州連帯協議会(さが・(長崎))で、取り組み準備のためのJFSAの学習会がありました。

JFSAの取り組み

希望を支える
スラムの学校の運営資金

西村さんは、パキスタンの出稼ぎ労働者たちから頼まれた家族への届け物を携え、1991年パキスタン各地を訪れる。そこで、目に飛び込んできたのは、物乞いをする子どもたちだ。差し出される手に、僅かなお金を乗せることはたやすいが、それでこの子どもたちが救われるわけではない。この子どもたちが、泥沼の貧困から這い出すためには教育を得るための知識。学校

ファイバーリサイクルの取り組みの現状と、今後についての共有の場
2010年4月19日
グリーンコープ共同体主催
参加約100人

単協報告



やまぐち
組織委員長
久保かおりさん

「不要なものを寄付するのではない。相手に役立つものを届けるのだ、ということを考えてほしい」という思いで取り組んでいる。昨年秋のついで、パネルを作って説明と呼びかけを行った。



かごしま
理事長
川原ひろみさん

JFSAの集荷場を見学し、山積みになった古着を見て、約束事を守って発送しないと大変だと感じた。実験展開では、ハンカチなど需要の高いものを中心に集め発送した。今後は地域の組合員にも呼びかける。



ふくおか

左から組織委員長 大橋由美子さん、グリーンコープ運動推進プロジェクトチーム 宗晶子さん、岩橋しのぶさん

2007年からこれまでに14,800kgを発送した。プロジェクトチームメンバーで古着を持ち寄って発送するまでを実践体験をした。機関紙で、「古着を送るときは過剰に包装しない」とことや「古着でパキスタンの子どもとつながっている」などの感想を伝えた。



おおいた

副理事長 塩月恵子さん(左)、組織委員長 矢野絵理さん

子どもたちの自立に役立ち、資源を大切にすることにもつながり、仕事も生み出す有意義な取り組みだ。単協の理事がJFSAの作業体験や定期総会へ参加するなど積極的に取り組んでいる。



西村さん(左)、田邊さん

支援をはじめて間もない頃、アルカイールアカデミーに通う当時13歳のヤスミンさんに西村さんは出会った。彼女は「医者になりたい」という希望を胸に、ひたむきに勉強し

生かされている
ファイバーリサイクル
世界で消費されている繊維

た。スラムでの極貧の生活では大学に行くことは不可能。それでも彼女は「神様がチャンスを下さったら、応えられるように準備しておく」と話した。「こうした子がたくさん子どもを助けるというより、子どもたちの未来への投資と考えてください」。西村さんの言葉は熱い。

JFSAに集められる古着の約70%が現地のアルカイール事業グループに届けられ、カラチの古着市場で買い取られる。この収益が、アルカイールアカデミーの運営資金となる。約30%はJFSAの運営資金のために日本でリサイクルされている。これまでJFSAがパキスタンに送った古着は780t、アルカイールアカデミーが得た利益は2000万円を超えている。この資金によって、計画的で自立した学校運営が可能となっている。現在、アルカイール

アカデミーで学ぶ生徒は約2500人(5~15歳、熱心な先生たちが約40人。アルカイールアカデミーで学んだ経験がある親たちは、教育に理解があり、貧しくても自分の子どもたちをできるだけ学校に通わせている。

入学希望の子どもたちは毎年約700人いるが、現在の規模では実際の受け入れは200人しかできない。「教育の力は、少しずつパキスタン社会を変えていくはずだ」と田邊さんは話を結んだ。

ファイバーリサイクル学習会

西九州連帯協議会主催



田邊さんと西村さんのパキスタンでのできごとや古着のリサイクルについての話に、参加者は真剣に聞き入る。会場からは「ヤスミンさんの話に感動しました。ぜひ役に立ちたいと思います」、「さっそく、準備をしたいです」、「できるだけ多くの組合員に伝えたい」など、取り組みに積極的な感想が出された。さが・(長崎)は2010年の総代会で取り組みの提案を行った。



No.23

原発を止めると電力不足になるのでしょうか

日本では現在、電力の約30%が原子力で供給されています。そのため、ほとんどの人が原子力発電を廃止すれば電力不足になると考えています。本当に不足するのでしょうか。

実は、原発の稼働率を上げるために、火力発電所の半分以上を停止させているのです。原発は巨大なシステムであり、原子炉の出力や冷却水の温度、圧力など全体として微妙なバランスが崩れると大事故を起こす危険性があるので、電力の需要に応じて自由に発電量を調整することができません。だから原発は昼夜を通してフル稼働しており、調整して運転できる火力発電は40%前後の稼働率にとどまっているのです。

このように発電設備を運用した結果、「日本の電力の3分の1が原子力」であるということになります。原発が中心になっている今の日本の現状について考えることが必要だと思います。

出典:「原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識」
東京書籍 広瀬隆 藤田祐幸
グリーンコープ共同体組織委員会

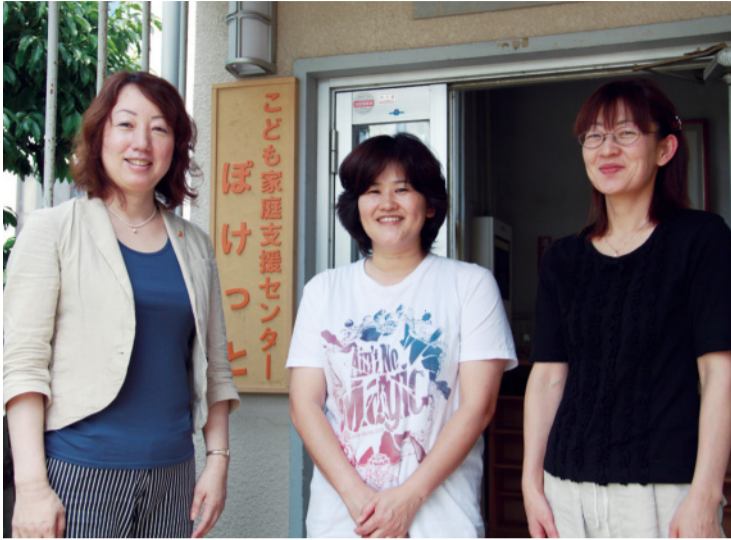
投稿募集

私の好きな
グリーンコープ商品
400字程度
A4切 毎月末
住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
住所氏名などの組合員の個人情報
は、本紙に掲載の場合のみ使用
します。
〒812-8561
福岡市博多区博多駅前3-36 博多ビル7F
グリーンコープ福岡支店(福岡市博多区)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-448-1787
Eメールアドレス koho@greencoop.jp

いま地域を考える

No.204

出会うからつながりへ
さまざまな活動を育んでいく



左から大嶋美智子さん、山根房江さん、中村紀子さん

40年前、山口県に自閉症児とその家族の会が発足しました。県内には、4つの分会があり、周南分会はその一つです。2010年より社団法人から「NPO法人山口県自閉症協会周南分会」(以下周南分会)に変わり、活動の幅を広げてきました。

会員の大嶋美智子さん(グリーンコープやまぐち生協組合員)たちに、活動のようすや、地域との関わりなどを聞きました。

NPO法人
山口県自閉症協会周南分会



会の活動や、生活の中で使われている自立支援グッズの一部
活動のスケジュール、行動の順序、コミュニケーションの方法などが
分かりやすいように絵や写真を入れて全て手作りされている

きっかけは出会いから

自閉症児は、見たり聞いたりすることや感じることを普通の人と同じように理解することができない。自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを汲み取ることが難しい。知的障がいや伴うことが多いが、伴わない場合も知的機能のバラつきや偏りが見られる。他者との関係性が作れず、言葉の発達が遅れたり、極端なこだわりを見せる傾向がある。性格的な偏りや育て方の問題のように誤解されること

が多いが、自閉症は、先天的な脳機能障がい、その原因や医学的な治療法は明らかになっていない。自閉症への理解と適切なサポートが求められている。
周南分会の会員は25歳から30歳までの自閉症児を持つ親50人。主な活動は、親子の交流や、情報交換。子ども同士が学び、遊べる催しなどだ。2009年にグリーンコープの福祉活動組合員基金の助成を受けて活動している。

6年前から会に関わっている大嶋さんは、長く活動に携わっている会員の1人。現在小学6年生の長男が、自閉症で聴覚が過敏だったため、数年前までは外出できないストレスを抱えていた。会の存在を知り、同じ悩みを抱えた人たちと出会い、相談しあううちに「悩んでいたのは私だけではなかったんだ」と、安心して自分と同じ気持ちを抱えている人とつながりあうことで役に立てたら...という思いから、活動に積極的に取り

り組み、活動の幅を広げていった。大嶋さんは、社会福祉法人共楽園の子ども家庭支援センター「ぼかぼか」(以下「ぼかぼか」)の相談員。子どもや、家庭の悩みなどを抱えている親の相談を受ける。周南分会の活動と似通うものがあり、自然に活動の中心を担うようになった。

毎月第二火曜日、周南分会が定期的に行っている茶話会は「ぼかぼか」で行われる。会員に限定してないので、子育て中の母親の情報交換の場になっている。また親たちが障がいについて学ぶ勉強・研修会や、自閉症児が日常生活・集団生活での関わり方を映像で学ぶビデオ学習会、生活の自立を支援するグッズを手作りして作製するなど、ぼかぼかとは会員の新しい活動を生み出す場ともなっている。

「同じゲームしよるね」と、自分から話し掛け、それを重ねていくうち皆でつむむようになった。その光景にビックリしました!と、母親は小学3年生のわが子の成長に目を細める。
自閉症児のきょうだいは普段構ってもらえないことが少なく、1人で悩みを抱えているケースが多い。「カカロ」はそうした子どもを支える活動を行っている。「ぼかぼか」のメンバーが、子どもたちを遊びに連れて行き、きょうだい児同士の親睦も深まる。将来相談し助けあえる関係を築ければという思いで活動している。

家族と地域が共に
つながりあう活動を

家族と地域の人々が交流する「遊ぼう会」では、会員の親子と、「ぼかぼか」のボランティアメンバーが一緒に楽しい時間を過ごす。バーベキューや、川遊び、山登り、買い物、うどん作りなど。今年2月には、広島県の温泉プールまでバス旅行をした。3月には周南分会親子が、「ぼかぼか」の代表の職場である地元の化学工場に招待された。周南分会と、「ぼかぼか」の活動を知り、「自分たちに何かできることはないだろうか」と、企業側からの提案で実現した。工場のような見学し、敷地内にある消防車の乗車体験や、放水のようすを間近で見ることでもできた。参加した会員たちは、「これまで地道に行っていた活動が地域に広がっていると実感しました。出会う

偶然が重なりあって
活動が広がっていった

周南分会、「ぼかぼか」。「ぼかぼか」の出会いがきっかけで、自然だったかのようにすべてがうまく調和している。活動していく中で、地域の人たちは自閉症を正確に理解するようになった。一方で、子どもたちはさまざまな人との出会いや経験から、スキルを積み重ねて自立する力をつけている。
「障がいのあるなしに関わらず、共生していける地域から社会へ、少しずつ人の輪をつないでいきたい。そのために活動も継続し、若いお母さんたちにつないでいきたい」と大嶋さんは願っている。



「遊ぼう会」でバス旅行をした

2010年6月の組合員数 403732人 (7/1現在)

リユースリサイクルデータ
2010年5月分

牛乳びん 回収本数 810,423本 回収率 100.4% (4月18日～5月15日回収分)	リユースびん 回収本数 194,282本 回収率 60.5%
トレー 回収重量 11,701kg 回収率 64.5%	モールドパック 回収重量 33,940kg 回収率 87.5%

フードマイレージ
2010年6月までに組合員の利用によってたまったのは

48,342,101.3
poco
CO₂に換算して4,834トン削減したことになります

アジア民衆基金
2010年6月までに組合員の利用によってたまったのは

9,913,286円

放射能汚染測定結果報告(200) 2010年5月
放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
※ 産直びん牛乳ノンホモ	熊本県	ND	ND	ND
※ なたね油菜の花物語	オーストラリア、欧州	ND	ND	ND
※ 純正ごま油	ナイジェリア、タンザニア	ND	ND	ND
※ よつ葉バター	北海道	ND	ND	ND
※ 子持ちしししゃも	アイスランド	ND	ND	ND